

わがまち自慢

市長室から



青森県むつ市
みやした そういちろう
宮下 宗一郎 市長



大地と海がせめぎあう多様な風土

下北の風土の特徴を一言で言えば「忍耐強さ」と「多様性」だと思います。

雪国に共通して言えることです。が、私たちは、冬は1時間くらいかけて雪かきをしなければいけない。これが、忍耐だとか、

あるいは辛いときに頑張っているのか、そうした気持ちに繋がっているのではないかと思います。戊辰戦争に敗れた会津藩が、斗南藩としてここ下北に移封されてきたわけですが、原野を開拓するなど相当苦労されています。私は去年、会津まつり会津藩公行

列に松平容大の役で参加させていたなど、会津若松市とむつ市は姉妹都市として交流しています。当時、会津の方々を約1万7千人受け入れまして、今でも彼らの子孫の方々がつくる斗南會津会というグループがあります。雪国であることに加え、下北の人々の「忍耐強さ」というのは、こういう歴史からも、DNAとして残っているのかもしれない。

また、北前船によって伝えられた京都の祇園祭の流れを汲むお祭りが残る田名部、旧海軍の町・大湊のほか、津軽海峡に面する大畑や、陸奥湾に面する川内や脇野沢などは、漁師町で浜の気質が残っており、人情という意味で極めて多様性のある土地柄だと感じています。

下北地域は半島ですが、ほとんど「島」だと思っています。普通の島と違うのは、日本海、津軽海峡、太平洋、陸奥湾、つまり湾と海峡と太平洋と日本海という大きな多様性のある海に囲まれていること。よって、4つの海の恵みを、すべて

大間のマグロがありま
す。津軽海峡ではイカ
も獲れます。太平洋で
は、ウニやアワビがあ
ります。陸奥湾ではホ
タテとナマコ。世界的
なレベルで見てもかな
り良いところにいる素
材ではないかと思いま
す。そういった意味で
は、「食」が一番の自
慢です。

それと下北ワイン。ワインは今、非常に伸び代のある産品だと思っています。雇用や作付面積が毎年伸びていますし、ワイナリーを新しく作る計画もあります。そして何と言っても、マーケットが無限に広がっています。土地がブドウに慣れ、かなり良いワインができてきており、特に白ワインは一級品だと思っています。



「むつ市のうまいは日本一」に挙げられている「大畑海峡サーモン」、「イカ」、「陸奥湾ホタテ」、「下北ワイン」、「一球入魂かぼちゃ」

「ジオパーク」活動は究極の地域づくり

自然景観、信仰という意味では、下北地域は非常に特異性があります。自然が作り出した信仰の地だと思っ
ています。その一つが恐山。宇曾利山湖というカルデラ湖を中心に極楽浜、さらには少し行くと地獄の景色、様相。あの世とい
うものが、まさにこういうところだと、経験、体験できるスポットで
すし、温泉も湧いています。

また、佐井村には仏ヶ浦というところがあります。全長2km位の海岸線に90mほどの、仏具や仏様の顔に見えたりする岩が立ち並んでいます。これらはすべて、大地と海がせめぎ合う自然環境の中で育まれた景観です。こうした自然が豊かな産品を生み出しています。何事も、ストーリーが必要だと思っ
ていますが、自然と食を繋ぐ



〔上〕釜臥山からのむつ市の夜景。アゲハチョウの形をしている。
〔中〕脇野沢地区の鯛島
〔下〕川内地区の大湾

て召し上がっています。だ
くことができま
す。この多様性がむつ
市の大きな強味だと思
っています。典型的なもので
は、海流に乗って津
軽海峡にやってくる

トータルなストーリーとして売り出す戦略と持続可能な地域づくりの一つとして『ジオパーク』活動を行っています。

この活動は、今やユネスコの正式プログラムになっています。世界遺産も正式プログラムですが、その違いで一番大きいことは、世界遺産はモノに着目していることです。つまり、その土地の文化、自然に世界有数の価値があるかということなのです。

ところが、ジオパークで焦点を当てているのは活動なのです。そこに生活する人たちが、大地や自然を使って、どういう活動をしているか。それが日本の水準に達しているか。それが日本の水準に達していれば、「日本ジオパーク」、世界の水準に達していれば「世界ジオパーク」に認定されるということなのです。実は一昨年、認定見送りになってしまいました



ジオパーク構想のロゴマーク

短命県の汚名返上のための健康増進施策の推進

青森県は、平均寿命が一番短い。そして、働き盛りの50代の方の死亡率が一番高い。その中でも、むつ市は最悪の状況にあります。全国の自治体の中で男性がワースト8位、女性がワースト16位という状況です。

原因は特定されていて、一つは喫煙率が高いこと。それから食事で塩分を取りすぎる。更に運動する機会がない。医療費がどんどん嵩んでくると国保会計も一般会計も非常に圧迫されます。病院に行かなくてもよい体を作ることが大

したが、今年、再度挑戦します。前回の見送りの大きな原因の一つに、地元の認知度が足りなかったと認識しています。ですから、ジオパーク認定に向けた住民の活動、企業の活動、お店の人たちの活動をどうやって盛り上げるのか、というところに、大変力を注いでいます。

世界遺産と比べて、どちらが持続可能かというと、実はジオパークの方だと私は思っています。ジオパークの場合は、活動に着目して、4年に1度、認定が更新されます。すなわち、4年間、保全部ができていくか、活用がされているか、ということを見直しされるのです。ですから、今まではモノを再発見して、住民がよいモノを繋いでいく必要があります。これを積極的に推進することは、究極の地域づくりだと思っています。

『健康マイレージ』事業です。マイレージのシートを作って、散歩に行ったりとか、健診を受けたとか、市の健康イベントに参加したなど、一定のポイントが貯まれば、商品券を差し上げています。若い人向けには「むつ☆Walker」という万歩計機能付きのウォーキングアプリを開発しました。100日間で50万歩歩いたら、商品券を差し上げますという仕組みです。私も50万歩達成しました。私は、ししちょうで登録しているのですが、毎日の歩数ランキングが表示され、皆で競争している感じです。今日のランキングは33位ですね。



『むつ☆Walker (むつぼしウォーカー)』のウォーキングアプリ

これが好評で、目標の人数は達成しています。厚労省が出した試算の中では、1日1万歩を2万人が達成すれば、年間1億円の医療費削減に繋がるとされています。また、我々は1日の内、半分以

上会社にいる訳ですから、企業の人たちにも頑張ってもらおうということ。『すこやかサポート事業所認定制度』を設けました。健康を大事にする会社を認定して、認定を受けた会社の従業員さ

全国初、「高校生元気ふるさとアイデア選挙」を実施

27年度から、『高校生元気ふるさとアイデア選挙』を行っています。選挙権の18歳引き下げで、政策立案や投票という体験を通して政治参加の意識を高めてもらおうというものです。

今回の参政権拡大にどのような協力ができるか、ということを考え、身の回りのことを変えられるチャンスがあれば、参加してくれるのではないかと思つたのです。高校生を100人集めて、むつ市の課題とは何かということを考えてもらいました。人にやらせるのではなく、自分たちでできることを考えてくださいとお願いすると、高校生らしい良いアイデアが出てきました。

私は出てきたアイデアをみて、「関心を持って発言しただけでは何も生み出さないし、関心持ったことにならない」と発言したら、今度はそのアイデアを高校生たちが選挙をしようという話になりました。

私たちは、協定を締結している青森銀行から、車を買う時などに低利融資を受けられる、そういう仕組みを作りました。

これらはすべて弘前大学医学部と連携して行っている事業です。

選ばれた複数のアイデアは、高校生がプレゼンし、まちづくり市民委員や私も審査して、最後にグランプリを決めます。少しでも予算をつけて、何とか形として実現しようと思っています。そうするとまた次に繋がる。これを毎年のイベントにしようと思っています。政治参加、つまり自分たちの力で物事を変えていく、挑戦をしていくことの大切さを実感として、学んでいただきたいと思っています。



「高校生元気ふるさとアイデア選挙」の投票風景